

あ と が き

本年度は「富岡製糸場と絹産業遺産群」がユネスコの世界文化遺産に登録されて2年、また国宝に指定されている西置繭所の保存修理に関わる解体工事が2年目を迎えた年である。

さらに富岡製糸場の入場者は世界遺産効果が強く働き一日平均人数で見ると約3,800人となり昨年度とほぼ同様であった。

世界遺産部の組織機構上、富岡製糸場総合研究センターは富岡製糸場保全課の保存活用係に位置付けられ、主な業務は勢い保存修理に関わる仕事や大勢の来場者への補助業務に向けられてしまった。このような多忙の中で本来の主要業務である資料収集整理、調査研究の果実として刊行されたのが本報告書である。4人が各々の視点から論文を仕上げることができた。

今井論文は、富岡製糸場の操業開始3年後の明治8年に突如提起された民間払い下げ問題が様々な経過をたどりながら経営の底に流れ続けていたことを資料に基づいて追究したものである。この中で、従来富岡製糸場は赤字続きのため払い下げられたという説を否定し、最終的な主因は国会開設に伴う会計法制定が強く影響したことを指摘した。

結城論文は、彼が長年続けているお雇外国人の研究の中から、特に首長ポール・ブリュナに焦点を当て、ブリュナに関する業績が各界・各層から評価された事例を挙げて究明したものである。ブリュナは富岡製糸場の雇用満期後に上海に渡り、米国ラッセル商会資本による製糸場の設立を果たし、同社の倒産後は経営者となって活躍する一方、彼が上海フランス租界公董局董事に再選された功績等によりレジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ賞を与えられたこと等について詳細に究明している。

国宝の一棟に指定された西置繭所の保存修理に伴う解体工事が始められ、これによって創業当初並びに、その後の改修や付加施設等の状況が解明されつつある。岡野論文は、その中で、創建当初の木摺漆喰天井及び漆喰壁の特徴に注目し、欧米の保存修理方針との比較を試みようとした新しい研究分野である。

原合名会社の経営期の明治末期に優良糸は優良繭から、優良繭は優良蚕種からという原則的な理論に基づいて蚕産改良部を新設し、さらに部内に蚕糸研究課を設けて大規模な養蚕施設を立ち上げ蚕種製造を開始した。この蚕種製造は片倉経営期まで継続したが、工場閉鎖直前には建物自体を取り壊した。腰塚論文は、二期に亘る発掘調査から当施設の究明を図ろうとしたものである。

何れの研究も富岡製糸場に関わるものである。まだまだ課題を残してはいるが、現時点での研究の果実でもあるので報告という形でお役に立てればと想うところである。

平成28年3月

富岡製糸場総合研究センター

所長 今井幹夫